





鹵山文庫



大坂獨吟集

西山宗因世判
十百句

上卷

後音

下卷

由平

素玄

同

三昌

未学

意樂

悦春

嘉永

重安

六刀目弟

56 4096

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.



大獨吟

寛文十三癸酉の
内よるる者れハ

幾音

外 幸とらんをらんやらんは

外 彦屋のうわらんらんらん

外 柳も及もらんらんらん

外 其一玉をらんらんらん

外 まりて價子金月子銀

外 外 幸とらんをらんやらんは

外 外 彦屋のうわらんらんらん

外 外 柳も及もらんらんらん

杉鉄より浅茅生の宿

目後七新一キミカケあがりともは朽果て

大工つゝひや橋乃ははくわ

盆め廿秀句あり桂川さへてささく

ゆゝ行回も極した中

のりおる縁のぬらわさる部

なごこのけちちむゝるのま

桂のまよきあさのつゝる様

芝草もくく〜新あひり〜

ひのさうらふぬおこさつちり

おのたるるしあちの月

於後しつら白ひぬの西七

く〜のま路く〜く〜

外をうんでゆ膝のやほれま

梅のま枝よ〜く〜るれあん

家の富の富しはれんや守ら

ありとほらん〜梅の天つら

トせまて梅ありは乃とれ中

のせらるあ〜ら〜て月らの

心持も月とら共よもあ〜ん

〜〜〜舞の舞のま〜し〜

巾着し〜大〜た〜の〜

三田のあつはつおのころ

あつはつおのころあつはつおのころ

猿丸をたまきく麻のちり

判官のまあにさつ子月文て

すめちせめてさげのゆき

おれ交あつはつおのちり

鐘道のせつはつおのちり

あつはつおのちり

あつはつおのちり

あつはつおのちり

あつはつおのちり

なつはつおのちり

芭蕉をあつはつおのちり

あつはつおのちり

あつはつおのちり

あつはつおのちり

あつはつおのちり

あつはつおのちり

あつはつおのちり

あつはつおのちり

あつはつおのちり

あつはつおのちり

あせたりとせり

たりとせりとせり

あせり様とせり様

あせり様とせり様

あせり様とせり様

あせり様とせり様

あせり様とせり様

あせり様とせり様

あせり様とせり様

あせり様とせり様

あせり様とせり様

あせり様とせり様

あせり様とせり様

あせり様とせり様

あせり様とせり様

あせり様とせり様

あせり様とせり様

あせり様とせり様

あせり様とせり様

あせり様とせり様

あせり様とせり様

あせり様とせり様

ちい〜
 族の元月〜
 富〜
 酒〜
 存〜
 例〜
 村〜
 例〜
 素家

長女九
 西馬子判
 長女九
 西馬子判
 長女九
 西馬子判
 長女九
 西馬子判
 長女九
 西馬子判
 長女九
 西馬子判

おのゝこゝろのこゝろのこゝろ

歌の師匠をよめる

月もさくぬ鬼もさく

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

いんたうり後者ねまにまあり

あつたをたをるるあつたをたをるる

あつたをたをるるあつたをたをるる

あつたをたをるるあつたをたをるる

あつたをたをるるあつたをたをるる

あつたをたをるるあつたをたをるる

あつたをたをるるあつたをたをるる

あつたをたをるるあつたをたをるる

あつたをたをるるあつたをたをるる

あつたをたをるるあつたをたをるる

あつたをたをるるあつたをたをるる

あつたをたをるるあつたをたをるる

あつたをたをるるあつたをたをるる

あつたをたをるるあつたをたをるる

あつたをたをるるあつたをたをるる

あつたをたをるるあつたをたをるる

あつたをたをるるあつたをたをるる

あつたをたをるるあつたをたをるる

あつたをたをるるあつたをたをるる

あつたをたをるるあつたをたをるる

あつたをたをるるあつたをたをるる

あつたをたをるるあつたをたをるる

ひき入るは焼あまの月

まじり衣うらうらうけり

神楽の花は風おうらうら

外すむ塔垢離身もあはれ

名 奇りよみあまの神もあはれ

又ちうらうらうけり

嘯歌子あまの月

焼乙の煙をうらうけ

うらうけの二のうら

月のあまの月

なすもあまの月

十のあまの月

おのづかの光は遍照あはれ

あまの月

東山は信をて入のあまの月

前縁よんあまの月

能衣あまの月

来ぬあまの月

外すむ塔垢離身もあはれ

作例とるあまの月

ひのうらうら

あまの月

あまの月

あまの月

扇の影も移りぬけぬはなほふかきかた
 う 矢つ不憶まなく麻の影
 秋の田んぼもいそいそと又百も
 下れき湯割をいそいそと廻水
 浦切舟と代風をいそいそと
 舟の毎こまき湯割の風を
 本花も多敷ねえのぬたの
 ぬたも一本ねの下陰
 線香の燭籠もあつと
 流のうらみ散らぬるなり
 あゆみのまじりもあつと打ん

舟の影も移りぬけぬはなほふかきかた
 扇の影も移りぬけぬはなほふかきかた
 矢つ不憶まなく麻の影
 秋の田んぼもいそいそと又百も
 下れき湯割をいそいそと廻水
 浦切舟と代風をいそいそと
 舟の毎こまき湯割の風を
 本花も多敷ねえのぬたの
 ぬたも一本ねの下陰
 線香の燭籠もあつと
 流のうらみ散らぬるなり
 あゆみのまじりもあつと打ん

春のつぼみ金十から一

かきつらはなと実えに下けなす後

あつてさよふ親のゆきま

又さう秋よの毎さうとし

ねちまを命きつらふまあ

らう一吹に月をさけり

ここのれ吉野をおく様すま

おまゝのりする妹とせの心

妹衣たつらもさうして

行まなりぬる色路をの

倫をえおわせのこころは

双六乃さうしてつらうら

お日影のまのまは湯のたふ

お戸押さうらうら毎南

花もきて鬼一口まねられ

語り無常のこころすむ書

お惚のまのまあわてまの風

さうらうらうらうらうら

お折入らうらうらうら

お折入らうらうらうら

お折入らうらうらうら

お折入らうらうらうら

さしおの拘枝よりる淫海
焼るもほろり子よりるこ
おこめ姉許り八通流付ん
は身はある門よりらん
紙筆成ひける法の花衣
朝のむ初法あけりの

愚書又十三句

長廿二

かから猿尾ハ

猿就くす虎の

梅香判

のさしあはるる

是をとおるれ

鼻は使延八像をうり
余念なき服のよは指を
とつねあつてそは
と結ぶ一さのぬちらり
さるて又この年
と朝光てて交の樂
あまきこくは
はさるる

意楽

サといひて白つの時めく

まの月くやく美盤の上

積りき何程とちよ

膝は ぼるる

道服のすそより裏じりし
紙のひらくくちりおの路
百姓のあつものまのせ
塩屋れつ家花屋れ梅屋
夕暮の浦邊におめて居
くちまおらえぬあし船
昔酒のこも毒汗の合点
多きさけく申の周くせ
引くぬる盗人の足妹と
長豆屋れ里の屋極く
白ぬや梅屋らつる見

お加すしつら〜

お借さくお借乃は拾二人

さあ〜と交交話〜

紙屋を告る使の追〜

醜を〜とあ〜と〜

花の宿はお梅あつ月の書

おあ〜とすあ〜と川の川口

二
春風おき〜と風お〜

お〜と〜と〜と〜と〜

お〜と〜と〜と〜と〜

紙一紙子名取田

扇まじり入おめいし 撥刺

〜〜〜〜〜

果糖のし〜〜〜のま合子

丹川子校ねちちも出方ぬ

書院をば〜〜〜ははら

月あよの〜〜〜持の9

転使各戸の〜〜〜いさ

穢き〜〜〜おぼやけられ

月影の〜〜〜の〜〜〜

月影の〜〜〜種もさうあ

草の〜〜〜あつたわら

男〜〜〜〜〜

布帳繰るあ〜〜〜心

あき〜〜〜お打校

屋体〜〜〜この國境

持場のは伏〜〜〜

〜〜〜〜〜

書道よひる又人紙判

摺りも〜〜〜

〜〜〜〜〜

律儀まの〜〜〜

〜〜〜〜〜

美談の紀述のついでに

きりぎりすの橋とて妻母を舟

三 舟の風立ちぬとて

しるしをたづねて

はるの月入るを

橋あらしむる

夕涼の巻のついでに

松花まつり

きりぎりす

外 舟のついでに

お物事の終り

か 舟のついでに

美談のついでに

あ 舟のついでに

お 舟のついでに

三 舟のついでに

お 舟のついでに

入 舟のついでに

久 舟のついでに

幾 舟のついでに

同 舟のついでに

舟のついでに

くぬしのなるる月や川ゆらん
又物子く
おかしきあはし戸子あせ

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

くぬしのなるる月や川ゆらん

鏡の浦のほとけの御守り
おんまにんがくはくはくはく

高定娘多勢守りて
おんまにんがくはくはくはく

下々々々々々々々々々々々
おんまにんがくはくはくはく

標のうらたきりて
おんまにんがくはくはくはく

利永継子の浪きり
おんまにんがくはくはくはく

意風も風流のり
おんまにんがくはくはくはく

おんまにんがくはくはくはく

馬場町六十六番

長井三

梅前町

おんまにんがくはくはくはく

体人の御守り

おんまにんがくはくはくはく

おんまにんがくはくはくはく

おんまにんがくはくはくはく

おんまにんがくはくはくはく

おんまにんがくはくはくはく

おんまにんがくはくはくはく

おんまにんがくはくはくはく

西郷の味

狂言もまてあけ
おんまにんがくはくはくはく

親父あはれおのり
おんまにんがくはくはくはく

おんまにんがくはくはくはく

よからしめ下はたつて

橋くさく霞の縁こころも

下のよからしめ下はたつて

虹立そよよの目糸一服

又月もまゑなきのよそはえ

まじりあひまじりまじりあひ

魚こもろふあぢれ秋あて

かゝる家よ入ねの子

うひあつ命のうらたきるこ

菊散をゆめさい・れ中ら

菊川の源流の境と女子あて

伝書せの御蔵のこぼれ風

を語らまはる月日の節らのれ

遊陽の並二十八集

秋魚れ痛む日ある海よ新ん

拂子ら〜の〜

竹の葉を牛たらのしの籠

ワに魚入るのこ月院て

もらあひ〜こころあて秋

かゝるせう花も秋もあはれ

浦のまゝもあはれ〜曲終りや

鈴々子ほほえまのほほえ

かゝるこころあて〜こころあて

かゝるこころあて〜こころあて

野
野をさへくさるるに
よも七日月の輝きの
影をたぬ

新
白紙をたぬ
影をたぬ
影をたぬ

約
約をたぬ
約をたぬ

物
物をたぬ
物をたぬ

芝
芝をたぬ
芝をたぬ

野
野をたぬ
野をたぬ

年
年をたぬ
年をたぬ

海
海をたぬ
海をたぬ

舟
舟をたぬ
舟をたぬ

舟
舟をたぬ
舟をたぬ

舟
舟をたぬ
舟をたぬ

舟
舟をたぬ
舟をたぬ

かたがはのしほりまはるる
かたがはのしほりまはるる
盤ぶらりんりんのまはるる

こよこえのまはるる

かたがはのまはるる

あまのまはるる

かたがはのまはるる

かたがはのまはるる

かたがはのまはるる

かたがはのまはるる

かたがはのまはるる

かたがはのまはるる

のりつゆきまはるる

かたがはのまはるる

かたがはのまはるる

かたがはのまはるる

かたがはのまはるる

かたがはのまはるる

かたがはのまはるる

かたがはのまはるる

かたがはのまはるる

かたがはのまはるる

かたがはのまはるる

あはれむすまへぬ、ぬりて

うへ、ききもふたの娘はきき

あひよ、料屋あたられた

とまれば、あつた、あつた

あはれ、あつた、あつた

あはれ、あつた、あつた

あはれ、あつた、あつた

あはれ、あつた、あつた

あはれ、あつた、あつた

五箇條八新、あつた、あつた
あはれ、あつた、あつた
あはれ、あつた、あつた

あはれ、あつた、あつた

長十九

あはれ、あつた、あつた

あはれ、あつた、あつた

あはれ、あつた、あつた

あはれ、あつた、あつた

あはれ、あつた、あつた

あはれ、あつた、あつた

卷之二

六
二十六

